



つながる力



あそぶ力



ゆたかな心
たくましい力



分かって動ける授業づくり
～キャリア教育の視点から～



くらす力



はたらく力



目 次

1. 分かって動ける授業づくり	1 P
2. 研究の概要	2 P
3. 4つの力の定義	3 P
4. 授業実践	
小学部 「あそび①」「あそび②」	5 P
中学部 「国語」「数学」	9 P
高等部 「自立活動」「数学」	1 3 P
5. 支援ツール	1 7 P
6. 全体考察	1 9 P
7. コラム	2 1 P
8. 寄稿 藤原義博先生	2 2 P

1. 分かって動ける授業づくり

はまゆう支援学校が考える「分かって動ける授業づくり」とは、児童生徒が自立的・主体的に授業に参加し、学びを深める授業づくりを指します。

これまで、私たちは、授業参加の難しい児童生徒には教師が横に座り、活動から逸脱しないように支援してきました。児童生徒が授業に向かいやすいように、課題準備は教師が行い、難しいことは児童生徒に変わり教師が行うことで支援してきました。授業からの逸脱や課題中の混乱は少なくなったかもしれませんが、このような人による「張り付きの支援」や「手厚い支援」方法が、本当に児童生徒の学びを深められているのかと考えるようになりました。

そこで、本校では、児童生徒が授業で「何」をするのかが分かり、自ら活動を起こせる授業を目指し、児童生徒を取り巻く「物」や「支援ツール ※1」を充実させること、「環境（物の配置、動線、児童生徒や教師の位置取り）」を見直し、整備することを行いました。そして、たくさんの「活動（学習）機会」を設定することで、確実に学べる授業をすべての授業で実現することを目指しました。

すべての授業における自立的・主体的な参加は、学びを深めるだけでなく、家庭、地域での自立的・主体的な参加につながる取り組みだと考えました。

※1 支援ツールとは、「児童生徒自身が自発的に取り組むことができるような手だてや援助。自ら活用することができ、学校場面だけでなく、家庭、地域への活用を広げられるもの（武蔵・高畑,2006）。」を指します。

2、研究の概要

1. 研究主題

1) これまでの研究について

本校は、平成 20 年度より、児童生徒の自立的・主体的な授業参加を目指し、「授業改善・分かって動ける授業づくり」に取り組んできました。「物」や「支援ツール」を充実させること、期待される行動を起こしやすい「環境（物の配置、動線、児童生徒や教師の位置取り）」を整備すること、授業内での「活動（学習）機会」を増やすことにより、自ら活動し学びを深める授業づくりを行いました。年間3回の研究授業を通し、教師の支援状況を確認するためのチェックシートや児童生徒の活動を評価するシート等を開発しました。これらを用い、教授方法の妥当性や学習到達度の確認を行いました。

また、このような研究成果を日常の教育活動に活かすために、平成 23 年度からは、月に 2 回、定例の授業改善会議「わかうご（分かって動ける授業づくり）の日」を設定しました。この取り組みは授業改善を支える重要な取り組みとして現在も実践しています。

2) 主題設定の理由

これまでの「分かって動ける授業づくり」の取り組みを、児童生徒が生きる「今」だけでなく、「卒業後」にわたり「地域社会で生きる力を育むための授業づくり」とするために、キャリア教育の視点を取り入れ、授業の目標や内容を深めることとしました。児童生徒のキャリア発達を見据え、授業では、学びと社会のつながりをより意識した目標設定や、習得した知識や技能を実生活の中で活用することを重視した学習内容を考慮しました。

「教授方法の工夫」を中心に進めてきた「分かって動ける授業づくり」の取り組みに加え、キャリア発達の視点を通した「授業目標」、「学習内容」の設定とその授業実践が、平成 25 年度から取り組んだ「分かって動ける授業づくり～キャリア教育の視点から～」です。

また、本研究を進めるにあたり、創価大学教育学部児童教育学科 藤原義博先生には 2 年間にわたり、ご指導、ご助言をいただきました。

2. 研究仮説と手続き

「地域社会で生きる力を育むための授業づくり」を進めるために、キャリア発達を支える視点から「育てたい力の枠組み」を明らかにしました。それが、はまゆう版 4 つの力（つながる力、はたらく力、くらす力、あそぶ力）です。また、児童生徒一人一人の将来における「望む姿、望まれる姿」を想定することを行いました。授業づくりを進める上で、先ず「望む姿、望まれる姿」を想定すること、その上ではまゆう版 4 つの力を授業目標の中に組み込むことにより、児童生徒の「今」だけでなく「卒業後」を見通した「地域社会で生きる力を育むための授業づくり」ができると考えました。

授業実践は、小学部が「あそび」の授業、中学部は「国語・数学」「ことば・かず」、高等部は「数学」「自立活動」の授業を取り上げ、検証を進めました。研究授業では、授業見学者が、児童生徒の行動から、はまゆう版 4 つの力のどのねらいが達成されているかを記録し、その後 KJ 法を用い分析しました。各授業において、目標とした力が実際に身につけられる授業になっているかを児童生徒の行動から検証しました。

3、4つの力の定義

キャリア発達を促すための“育てたい力の枠組み”として

キャリア教育は、特定の能力や態度を育てることそのものを目的とするものではありません。幼児期や小学部段階からの教育課程全体において身に付けた能力や態度を通して、自分らしさを発揮していくことを目指すものです。そのため、子どもたちに関わる多くの大人たちが一体となって取り組める仕組みづくりが必要です。その“育てたい力の枠組み”の例として、国立教育政策研究所生徒指導研究センターはいわゆる“4領域8能力”を例示しました（後に“基礎的・汎用的能力”を例示）。また、特別支援教育の分野においても、国立特別支援教育総合研究所が、“知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」”を例示しています。

これらはあくまで例示です。これらを画一的に運用するのではなく、各校の実態に応じた視点を設け、キャリア教育を推進していくことが大切です。

本校のキャリア教育における“育てたい力の枠組み”＝4つの力のコンセプト

私たちは、本校の12年間を通して担任や教科を受け持つ教職員集団で共有できる言葉となるもの、さらに将来的には保護者や児童生徒との間においても共有できるものを志向しました。

①場面の枠組みの規定「くらす」「あそぶ」「はたらく」

キャリア発達とは、人がそれぞれの生活年齢や社会場面で役割を担い自分らしさを発揮していく過程です。本研究では、児童生徒が活躍する・将来活躍するであろう“場面”を想定することとしました。児童生徒個々に違う“育てたい力”が、具体的な場面でどのように自分らしく発揮されるのかについて、関わっていく大人たちが想像しやすくなると考えたからです。

②本校の大切にしてきた力の反映「つながる」

以前、本校では個別の指導計画でどのような目標が多く設定されているか調査したことがありました。その調査によるとコミュニケーションに関する目標設定が多数でした。本校では個々の実態は違えども、教職員たちはコミュニケーション能力の向上を重視し、取り組んできたといえます。場面の枠組みではありませんが、本校の教職員が大切にしてきたコミュニケーションを育てたいという姿勢は、本校の特色といえる内容です。

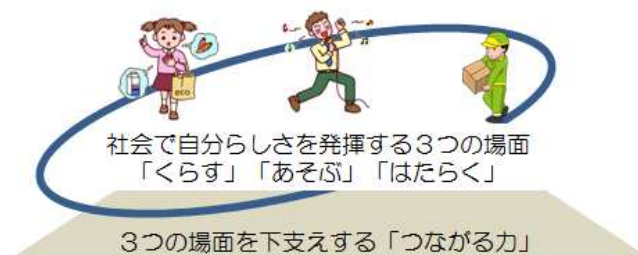
4つの力の設定

先のコンセプトに基づき、本校が大切にするキャリア発達を促すための“育てたい力の枠組み”として4つの力を設定しました。

くらす力	身辺自立など生きていくための基礎的な力。読み・書き・計算や公共交通機関の利用・携帯電話の活用など。
あそぶ力	生涯を通じて余暇を有意義に過ごすための力。夢中になれることを持つ。自由な時間を過ごすこと。はたらく力に強く関連。
はたらく力	労働に必要な具体的な知識・技能・態度。労働とその対価としての賃金との関連。または奉仕の姿勢。
つながる力	生涯にわたり家族や仲間、職場などで人と適切に人間関係を築ける力

「くらす力」「あそぶ力」「はたらく力」については、コンセプト①“場面の枠組みの規定”から設定しました。児童生徒が今と将来に向けて自分らしさを発揮してほしい場面を3つに分けました。

「つながる力」についてはコンセプト②“本校の大切にしてきた力の反映”から導きました。これら4つの力の関係性としては、「くらす力」「あそぶ力」「はたらく力」がそれぞれあり、これらを支える力として「つながる力」を位置づけています。



またこれら4つの力は、「卒業後のゆたかさ」と、「今のゆたかさ」の二軸を想定しています。

「卒業後のゆたかさ」とは、子どもたちが卒業し、社会に巣立ったときのことを想像し、そのためには今どんな力を育てたらよいかと考える視点です。

「今のゆたかさ」とは、授業で身に付けたことが他の学校生活や学童保育・家庭・地域社会等で発揮されることを願い授業を考える視点です。

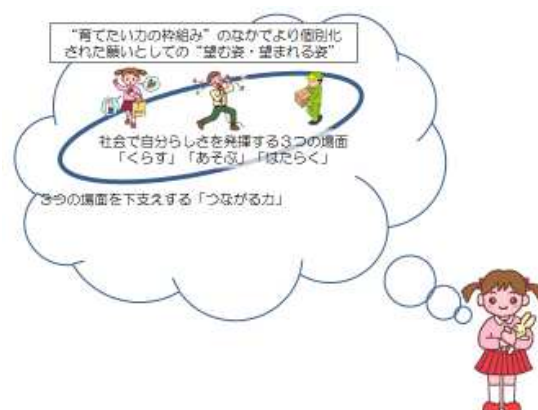


4つの力の枠組みをより個別化して表現する“望む姿・望まれる姿”

これら学校としての“育てたい力の枠組み”をもとに授業づくりに取り組むにあたり、学習指導案に“望む姿・望まれる姿”という欄を設けました。

児童生徒が、家庭や地域生活で過ごしている現在の様子、そこから見えてくる課題や将来像について、キャリア教育の視点を意識してまとめます。“育てたい力の枠組み”をより個別化し「〇〇さんにはこうなってほしいからこの単位ではこういうことを学んでほしい」という授業者の思いを表現しました。

また、日々の授業改善においても“望む姿・望まれる姿”の視点から改善の方向を話し合いました。具体的な方法としては“分かって動ける授業づくり”の教授方法を用いました。



〈参考文献〉全国特別支援学校知的障害教育校長会編著(2013)知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き 実践編 -小中高系統性のある実践-

4、授業実践

1

小学部 領域・教科を合わせた指導 「あそび」

動物ランドであそぼう

1、望む姿・望まれる姿

小学部段階は、基本的な生活習慣が確立できていない時期であり、将来に向けて生きていく基礎的能力の育成の時期である。将来的に地域での生活を営み、生きがいを持って暮らしていくことのできる姿を目指し、遊びを通して求められる力として「達成感を味わい、自分のことを知り、人とつながる力」を目標に、様々な基礎的な力の習得を目指していけるようにしたい。

2、児童の様子

本グループは、小学部 1 年生 8 名・2 年生 2 名の男子計 10 名で構成されている。ほぼ全員が広汎性発達障がいや自閉症である。当初、人的支援の必要な集団に対して、全ての教科を通して物理的支援を用いて学習することで、自立的な参加が見られた。遊びの活動の基盤となる運動・身体機能に課題がある児童がいたが、繰り返し学習する中で遊びへの主体的な参加が見られた。

3、単元のねらい

動物(カエル・アルマジロ・サル・アリ)が遊ぶ様子をイメージし、スライダー・トランポリン・キャタピラー・ターザン・迷路等の遊具の遊び方を知り、ペアで移動して遊ぶ活動を設定した。本単元では、好きな遊びを見つけて繰り返し遊ぶ(あそぶ力)、友だちと一緒に遊ぶ(つながる力)、準備・片付けを友だちと行う(くらす力)等を目標にしている。全ての児童が遊びに参加できることをねらい、友だちと関わり、役割を持つことを意識させ学ばせていきたい。

4、支援環境の工夫

(1) 集団への支援

① 物理的支援環境

・遊びカード (ツール①)

ペアごとの遊びを提示し、始まりの活動を知らせた。

・順番ボード (ツール②)

自ら遊具に移動できるように、ポイントごとにペアの顔写真を置いた。

・CD 曲

それぞれの遊びの制限時間を設定し、開始・終了を知らせた。

② 人的支援環境

・教師の定点配置

交代する遊具では、声かけを行ったり、手でのタッチを促した。

・ペアでの活動

友だちとの活動を意識し、全員が参加できるようにした。

(2) 個への支援

① 物理的支援環境

・仕事カード (ツール③)

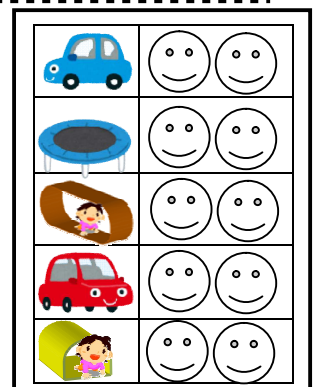
準備・片付けをペアごとに写真カードで提示した。

② 人的支援環境

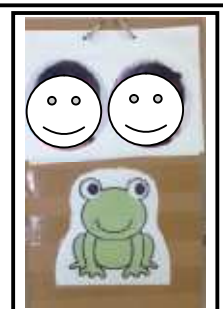
・MT に仕事カードを返す。

ペアごとにカードを返して、児童自ら仕事の終了を伝えた。

(ツール①)



(ツール②)



(ツール③)

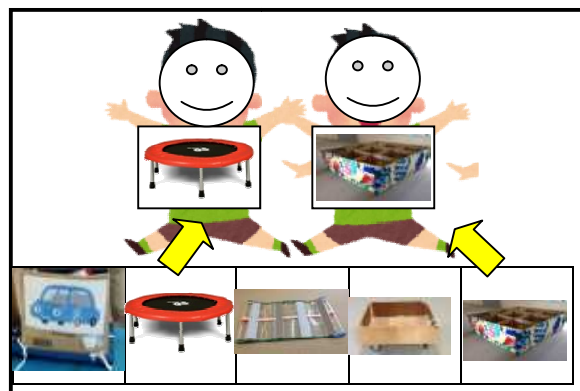
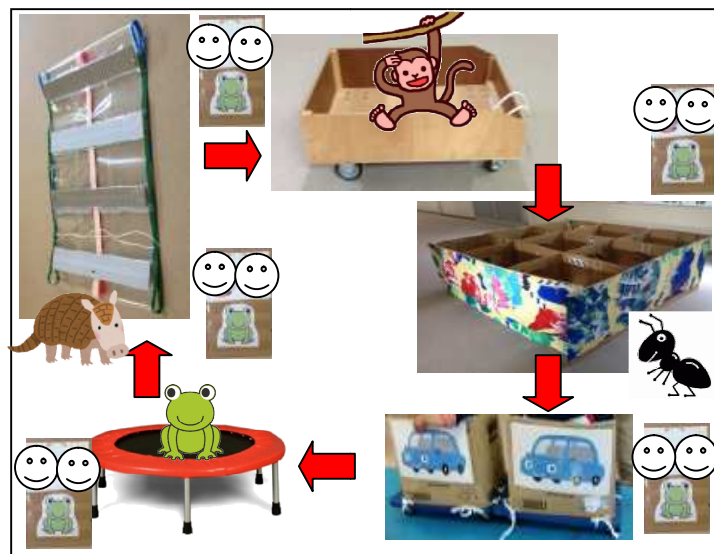


5、授業の展開

本時の目標…好きな遊びを見つけて、繰り返し遊ぶ。(友だちの選択を受け入れて、遊びを譲ることができる。)
友だちを誘ったり、待ったり、友だちに続いて遊ぶ。
準備・片付けを友だちと行う。

	学習活動、内容
導入	・ペアごとにベンチに座る。 ・始まりの歌を歌う。 ・本日のスケジュールについて説明を聞く。
展開	①サーキット遊びをする。 ペアでの遊びカードを見て遊具の所に移動。 仕事カードで、道具の準備をする。 CDを聞き、順番ボードを見て移動する。 ●スライダー ペアで乗り込み、滑り終わるたびに元の位置に車を戻す。 ●ミニトランポリン ペアでタッチしながら、交代して跳ぶ。 ●ミニキャタピラー ペアで乗り込み、コース内を往復する。 ●ターザン ペアで車に乗り込み、ひもを引っ張る。 前後交代する。 ●迷路 ペアで前後に進む。 ②好きな遊びをする。 ペアごとに遊び選択カード(ツール④)を選ぶ。 ・仕事カードを見て、道具の片付けをする。 ・スケジュールボードの前に集合する
まとめ	・終わりの歌を歌う。

配置図



(ツール④) 遊び選択カード

今単元の後半では、ペアで遊びを選択する活動を取り入れた。カードで好きな遊びをお互いに知らせ、遊びを決めるようにした。

6、児童の変化

・授業場面において

視覚的な支援ツールを頼りに、ペアでの活動が定着した。場面での役割や決まりを理解しているが行動に移すのに時間がかかる児童については、遊びの連続性を持たせるための遊具の改善や遊び方の工夫を行うことで、繰り返し友だちと一緒に遊ぶ姿が徐々に見られ始めた(あそぶ力・つながる力)。学習環境が整うと同時に(物を介して)、自分から友だちへの関わりを持てない児童が、ペアの友だちをモデルとして活動に参加するようになった(あそぶ力・つながる力)。

・その他の場面において

他の教科でも、準備・片付けを行い、学習環境を自分たちで整備していく機会が増えると、学習の流れへの見通しにもつながり(くらす力)、学習への参加が見られるようになってきた。また、他の場面でも、同じペアでの活動を継続したところ、友だちを意識して取り組む様子が見られた(つながる力)

忍者になろう！！

1、望む姿・望まれる姿

この単元を通して、「忍者になりきり遊ぶことができる」、「友だちといっしょに遊ぶことができる」、「準備・片づけができる」（望む姿）、また、将来の「余暇に自分の好きな遊びを楽しむことができる」、「自分の役割を理解して活動することができる」（望まれる姿）につながるのではないかと考えた。また「忍者修行（あそび）のルールや仕方が分かり遊ぶことができる」（あそび力）、「友だちの遊び姿を見て自分も挑戦しようとする」、「友だちと協力して敵を倒すことができる」（つながる力）活動を通して、自分の好きな遊びを見つける力や自分で遊びを拡げる力を育んでいきたいと考える。

2、児童の様子

本学習グループは3、4年生14名（男子13名、女子1名）で構成され、発達段階は1歳6ヶ月から9歳までと幅が広い。また、障がい種も広汎性発達障がい、非定型自閉症、自閉症、知的障がい、ダウン症候群、ソトス症候群と多岐にわたっている。学習場面においても、ルールや役割などを理解し自主的自立的に授業に参加できる児童、そうでない児童まで様々である。児童同士の関係性においても自ら関わる力を持つ児童が数名いる反面、関わりが難しく場面設定をする必要のある児童も多い。

3、単元のねらい

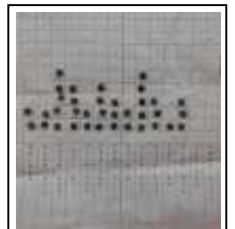
本単元「忍者になろう」は、様々な忍者修行（あそび）を行い、忍者の術を高めていくという学習である。この忍者修行（あそび）には平行遊びや対面遊び、順番遊びやグループ遊び、さらにごっこ遊びに至るまでさまざまな遊びの要素を取り入れ、児童たちが意欲的に活動できるように設定した。また、忍者修行を通して、「ルールや仕方が分かって遊ぶことができる」「自分たちで準備や片づけができる」「友だちと協力して活動することができる」ことに重点をおいた。このように上記のことを踏まえた上で遊びそのものの楽しさや友だちとかかわりながら遊ぶよさを経験させたいと考える。

4、支援環境の工夫

（1）集団への支援

① 物理的支援環境

- ・自分たちで修行に取り組めるようにサーキットの回る方向に矢印を提示した。
- ・修行をクリアすることにシールを用いて視覚的に分かる評価を行った。（ツール①）
- ・児童が楽しんで修行できるよう、たたくと音になってゆれる的を設置した。



（ツール①）

② 人的支援環境

- ・MT・STの立ち位置を工夫し、児童の活動を予測し、必要に応じて指導した。
- ・授業の終わりにみんなで協力して敵忍者をやっつける活動を設定した。（ツール②）



（捕まった人たちの表）

（ツール②）

（2）個への支援

① 物理的支援環境

- ・爆弾を投げる位置を工夫し、児童が選択できるようにした。
- ・児童の実態に応じて、飛び石の順路を選べるようにした。（ツール③）

② 人的支援環境

- ・個別対応が必要な児童には、教師が距離感を意識し、必要に応じて支援を行った。
- ・必要に応じて、教師が体の動かし方や使い方などを指導し、体得を図った。
- ・児童の活動に成長がみられたり変化がみられたりしたときは、賞賛し、ともに喜び合った。

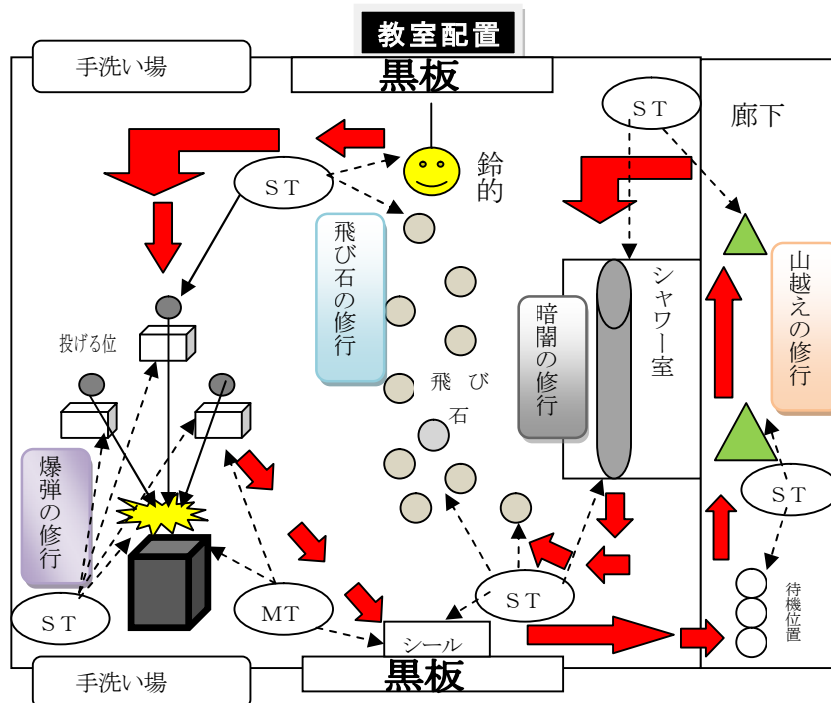


（ツール③）

5、授業の展開

本時の目標…忍者修行のルールや仕方が分かって遊ぶことができる。
 支援ツールを活用して忍者修行の準備・片付けができる。
 忍者修行を通して友だちと協力して活動することができる。

	学習活動、内容
導入	① 集合する。 ② はじまりの歌を歌う。 ③ 忍者(教師)の話聞く。 ④ 今日の予定について知る。 ⑤ 忍者体操 ・自作体操ビデオを見ながらみんなで忍者体操をする。 ⑥ おわりのあいさつ
展開	⑦ 忍者修行【忍者サーキット】 「爆弾・飛び石・山越えの術・暗闇の術」 ・今日の頑張りのポイントを発表する。 ・その場で練習を行い、上手な児童は前に出て発表する。 ・サーキットの準備を行う。 ・乱太郎、きり丸チームに別れて各チームスタート位置につく。 ・各自1周するごとに表にシールを張る。 ⑧ 休憩をする。 ⑨ 修行成果の発表 ・修行の成果をみんなの前で披露する。 ⑩ 敵忍者が登場し、みんなで協力して倒す。 (爆弾の術で倒す)
まとめ	⑪ 振り返りを行う。 ・感想を聞く。 ・忍者修行クリアで賞をもらう。 ⑫ みんなで後かたづけをする。 ⑬ おわりの歌を歌う。



6、児童の変化

・授業場面において

各修行場面のルールを確認しながら丁寧に取り組んできたことで、児童の修行への意欲を高めることができ、自ら修行に取り組むなど主体的な姿が多く見られた。支援ツールを手がかりに順番を守ったり、友だちの様子を見て自分も挑戦しようとしたりする様子が見られるようになってきた。また、各修行場面でのがんばりポイントを明確に提示することにより、修行の感想を引き出し評価することができた。同時に毎回シートによる振り返りを行うことで、好きな修行を見つけられる児童が増えた。

・その他の場面において

細かい改善を重ねてきたことで、環境の構造化や準備・片付けにおいても役割の明確化などを工夫できたことにより、安心して授業に挑み、生き生きと活動する姿が見られた。毎回違った修行を展開してきたことにより、児童の意欲を持続することができた。そのことにより、休憩時間等の遊びにも広がってきている。

『何してるかな?ゲーム』～みんなで作ろう三語文～

1、望む姿・望まれる姿

本グループの生徒は全員自閉症スペクトラムに属する。内言語は多いものの、他者への自発的なコミュニケーションは少ない。必要なときは自分の要求を簡単な言葉で伝えるが、語彙数が少なく、発音の不明瞭さ等が原因で、確実に伝わるのが難しい。将来、他者に向けた自発的な言語活動が増えることにより、人との関わりが広がり、より豊かな生活につながってほしいと考える。

2、生徒の様子

認知適応はおおよそ3歳～6歳と差があるものの、言語社会に関しては全員3歳程度と、広汎性発達障がい特性ともいえるコミュニケーション力に課題がある。学習態度は、聴覚過敏で音楽が流れていると入室できなかつたり、好きな活動をしたくて、あるいはトイレに行きたくて、離席や教室を出て行ったりする生徒が数名いる。自分のしたい活動をとめられたり、変更されたりすると激しく怒り、他傷行動が見られる生徒もいる。

3、単元のねらい

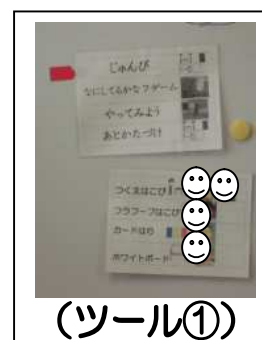
本単元では、語彙数を増やすこと、発言の機会を多くとり自発的な発言を促すことをねらいとしている。さらには、動作語の定着と般化をねらい、学習した動作語を自分たちで動作化する内容を取り入れている。また、身近なものの名称を認識し、活用できるとより生活が豊かになり、主体的なコミュニケーションも増えと考え、物の名称のカタカナ読みに触れる機会を設定した。

4、支援環境の工夫

(1) 集団への支援

① 物理的支援環境

- ・活動の流れがわかるよう、画像と文字でスケジュールを提示し、準備、後片付けの役割を画像と文字のカードで提示。(ツール①)
- ・準備・後片付け、及び活動中の動線のシンプル化。
- ・主体的な活動を促すために、役割の順番と交代をパソコンのソフトを活用して提示。発表者がエンターボタンを操作するようにした。(ツール②)
- ・発表の意識化、発表者への注目を促し、音声を聞き取るため、メガホンを使用。(ツール③)
- ・役割交代の際、しっかり相手を意識して交代できるよう、タッチやメガホンを手渡すことで次の人に合図をする。



(ツール①)

② 人的支援環境

- ・活動初期は、活動方法を理解させるため、身体的プロンプトを行なう。
- ・称賛のため、また、活動の終了の意識付けのためハイタッチをする。



(ツール②)



(ツール③)

(2) 個への支援

① 物理的支援環境

- ・自分の順番や始動のタイミングが分かりづらい生徒に対しては、友だちからのタッチで活動の始まりを意識させる。
- ・鏡や水道に興味がある生徒は、座席位置に配慮する。

② 人的支援環境

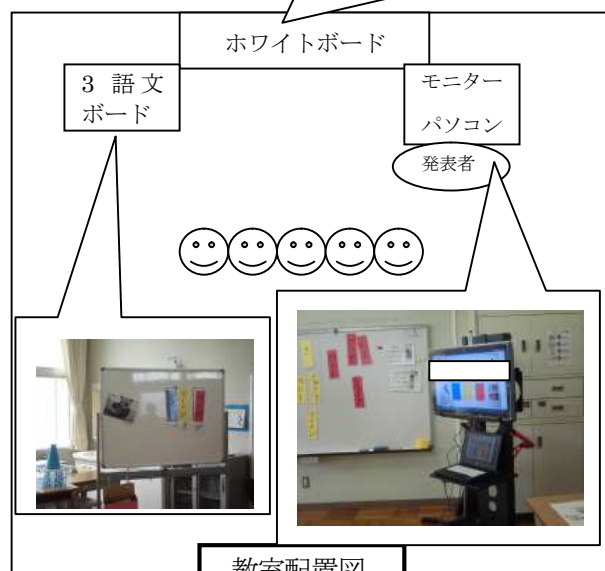
- ・三語文を読む際、助詞が抜ける生徒には、指差しなどで意識して読ませる。
- ・正解がわからず困惑している場合、本人が考えて活動する余地を残しながら、身体的プロンプトや言葉かけ、指差しなどで支援する。

5、授業の展開

本時の目標…写真カードを見て、3 語文の文章を構成することができる。

3 語文の文章を読んで、実際に動作化できる。

	学習活動、内容
導 入	①はじまりのあいさつ ②学習内容を知る 1 準備 2 文を作ろう 3 発表しよう 4 片付け ③本時の活動の準備をする
展 開	④全員で手分けをして文を作る。 ・写真カードを選ぶ人 ・主語カードを選んで人は人 ・目的語カードを選んで人は人 ・述語カードを選んで人は人 ・出来上がった文を発表する人 ⑤役割を交代しながら上記の活動を繰り返す。(10 回程度)
ま と め	⑥3 語文、2 語文の指令を受けて、その動作を発表する。 ・発表するために必要なものを選んで発表する。 ⑦後片付け ⑧おわりのあいさつ



あいさつの際、正しい礼のイラストを見せて、礼を意識するようにしている。



6、生徒の変化

授業場面において

準備や後片付けでは、自分の役割をしっかりと分り遂行できている。活動の交代をハイタッチやメガホンの受け渡しにしたことで、相手を意識する機会となり、自ら友だちの名前を呼んでハイタッチをしたりする場面も見られた。「が」「を」などの助詞を抜かして読んでいた生徒が、助詞を含めた3 語文をスムーズに読み上げることができるようになった。また、「投げる」「蹴る」の違いが曖昧だった生徒も、動詞の動作化の学習をすることで、実際の動きと動詞が結びつき、理解することができた。

その他の場面において

同じ学習集団の仲間をしっかりと意識できるようになり、名前をおぼえ呼ぶ場面が見られた。宿題で3 語文のプリントに取り組んだ。プリントの写真を見て、状況を「〇〇が、△△を □□する」という文を構成してことばで読み上げ、書くことができた。また、給食の場面では、「〇〇先生、ごはん、おかわりしてください」と3 語文の要求を伝える様子がみられた。

買い物学習 ～買い物のスペシャリストになろう！～

1、望む姿・望まれる姿

本グループの生徒は、買い物の手順はほとんど理解できていて、100 円を持ってスーパーマーケット等でお菓子を買うことができる生徒たちであるが、複数の買い物やお使いなどの経験が少なく、5 円 50 円 500 円玉の扱いが苦手な生徒もいる。将来的に、自立して生活していくためにも、丁度のお金の支払い方だけではなく、おおよそのお金の支払いや、お釣りが少ない金種で支払いができたり、電卓を利用して所持金の範囲内で買い物ができたりすることで、自らの生活を豊かにする術（すべ）を体得して欲しい。

2、生徒の様子

本グループは、ある程度生徒同士での会話が成り立ち、発問に対しての回答や意見を、活発に行うことができる。一方で、自分の意見を言い出せないでいる生徒もいる。また、会話が一方的であったり、言葉遣いが乱暴であるため、友だちとのトラブルが生じやすい。思考の偏りにより感情を適切にコントロールできず、他傷自傷といった行動の形で表出する生徒もいる。学習に関しては、個人差があり、個別に配慮・支援を必要とする。

3、単元のねらい

買い物学習を通して、支払い方や財布の扱い方、電卓の利用、チラシの中から予算内で食材を選ぶなど、様々な買い物の場面において、自信を持って「スマートな買い物」ができるようにねらいを定め、「くらす力」を身につけてもらいたいと考える。

4、支援環境の工夫

(1) 集団への支援

① 物理的支援環境

- ・実際の買い物につなげるために、「本物のお金」を使用した。
- ・各種肉のグラム幾らの表記を、1 パック幾らに変更したり、調理に必要な材料を集めたりした、独自のチラシを準備した。
- ・チラシを見ながら、買い物に必要な材料の名称・値段・画像が記入でき、合計金額を記入できるボード。友だちからのチェックも併せて記入できるようにした。(ツール①)



(ツール①)

② 人的支援環境

- ・チラシから食材を選ぶのが苦手な生徒には、ST が横につき声掛け支援をする。

(2) 個への支援

① 物理的支援環境

- ・5 円、50 円、500 円玉の使い方が苦手な生徒に対して、視覚的に分かりやすくなるように両替カードを提示した。
- ・支払う金種の選択が難しい生徒に、金種ごとに整理しやすく、数えやすいシートを提示した。(ツール②)

② 人的支援環境

- ・チラシの選択や、お金の支払い等、間違いやすい場面での、声掛け支援を行う。



(ツール②)

5、授業の展開

本時の目標…チラシを見て、予算内で6種類の食材を選ぶことができる。
財布からおおよそそのお金を支払うことができる。

	学習活動、内容
導 入	① 始まりの挨拶 ② 本時の説明を聞く ③ 準備をする
展 開	④ 今日のメニューを聞く メニューの画像を見て、必要な食材を発表する ⑤ 買い物ボードに自分が考える「食材の名前」を記入する ⑥ チラシを見て、値段を記入する ⑦ 電卓を使って、合計金額を計算する 1000 円以内に収まっているか確認し、金額を記入する (オーバーしていたら、食材を変更する) ⑧ チラシを切り取り、買い物シートに貼る ハサミを取りに行き、チラシを切る ⑨ 友だちと買い物ボードを交換し、合計金額の確認作業をする ⑩ 財布から、おおよそそのお金を支払う練習をする
ま と め	⑪ 自分の買い物予定を発表する お立ち台の上で、差し棒を使って発表する ⑫ 片付け ⑬ 終わりの挨拶



6、生徒の変化

・授業場面において

買い物学習の活動の流れに、スムーズに取り組めるようになってきた。財布から、硬貨を取り出すときに机の上に硬貨を広げていた生徒が、1 つずつ手の平で持ちながら数えることができるようになった。料理などの生活経験の少ない生徒は、友だちが発表した食材を参考にしながら、選ぶことができた。チラシを見て食材を選ぶ時に、例に出した物以外に、自分の好きな食材を選ぶことができた。支援ツールの使い方に慣れ、5 円 50 円 500 円の硬貨を自ら使用できるようになった。

・その他の場面において

校外学習でファーストフード店を利用したときに、決められた予算の中から様々な組み合わせを工夫しながら注文することができていた。また、店員との対応は、経験が無い生徒が多かったが、メニューの中から欲しい物を、はっきりした言葉で注文し、支払いのお金を自信を持って出すことができていた。大きな金額の買い物に対する苦手意識が、少しずつではあるが克服できてきている。

『からだの動きを通した学習』

1、望む姿・望まれる姿

教師や仲間と一緒に動きをあわせて活動することを通して相手を意識し、人と「つながる力」や「あそぶ力」を育てたいと考える。また生徒一人ひとりが自分の役割を理解して準備や片付けを行うことや、見通しを持って自ら身体を動かし道具を使うことで「くらす力」を育て、生活していく中で必要な動きを身に付けさせたいと考える。

2、生徒の様子

本グループは、2年生男子2名、1年生男子6名、女子2名の計10名で、6名が広汎性発達障がいや自閉症の診断を受けており、言語表出だけでなく言語理解においても課題がある。また移動に時間がかかる生徒や介助を必要とする生徒もいる。授業に見通しを持って主体的に行動する生徒は少なく、視覚的な支援を受けながら教師の指示や誘導で活動する生徒がほとんどである。

3、単元のねらい

活動内容がシンプルでわかりやすく、楽しく体を動かせる授業として本単元を設定した。①教師の直接的な支援がなくても、マット（座席）や道具を手がかりに流れを理解して活動をする。②支援ツールを活用して一人でほうきを使った活動や準備・片付けができる。③自分でパラバルーンを持ち、教師や仲間を意識しながら活動する。④まわりの動きや曲の変化を意識して、走ったり歩いたりする。

4、支援環境の工夫

(1) 集団への支援

① 物理的支援環境

- ・授業の流れを見通せるよう、予定表（ツール①）を表示して確認できるようにした。
- ・生徒の好きな音楽を流し、曲にあわせて走る・歩く活動に意識が向けられるようにした。パラバルーンを広げたところに、ウォーキングの流れで全員が集まれるように設定した。
- ・ボンボンホッケーは広い体育館を半分に仕切ることによって、ボンボンを直線的にゴールまで運べるようにした。またゴール地点からポイント表の位置に移動し、コーンの横を通してスタート地点に戻るよう、生徒同士の動き（動線）が重ならないように設定した。（次ページ「体育館配置図（ボンボンホッケー）」）
- ・ゴール地点にポイント表を掲示し、生徒一人ひとり活動の結果が見てわかるようにした。（ポイント表、ツール②）

② 人的支援環境

- ・ボンボンホッケーはSTの役割を明確にして、必要な場所で支援を行うようにした。準備・片付けで自分の役割がわかりにくい生徒には、道具などの具体物を手渡し促すようにした。

(2) 個への支援

① 物理的支援環境

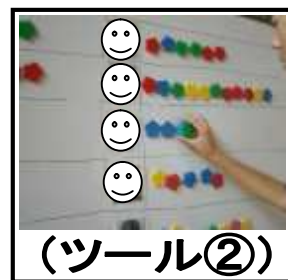
- ・待機場所がわかり自分で移動できるよう、座席を固定し、カードを貼って視覚的に確認できるようにした。（待機マット、ツール③）
- ・準備・片付けで自分の役割がわかるよう、カードで提示した。

② 人的支援環境

- ・活動の流れがわかるまでは個別指導を行った。
- ・生徒の理解度に合わせて、必要な支援をSTが行うようにした。



(ツール①)



(ツール②)

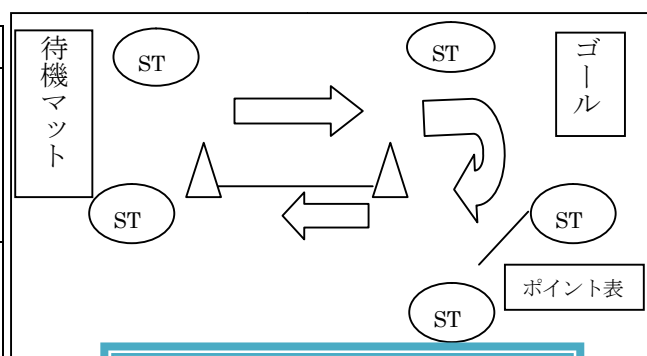


(ツール③)

5、授業の展開

本時の目標…活動内容や役割を理解して準備や片づけを行い、見通しを持って活動に参加できる。

	学習活動、内容
導 入	<基礎教室に集合> 1、始まりの会 始まりの歌、出席調べ、係りの仕事
展 開	<体育館に移動> 2、ランニングとウォーキングをする 3、パラバルーンをする ①「世界中の子どもたちが」の音楽に合わせて、上下に振る、左右に歩くなど ②大きなドームを作り中に入る。 ③バルーンを丸めて片付ける。 <待機場所に集合> 4、ポンポンホッケーをする（2回実施） ①係りの仕事の指示を聞き、準備活動をする。 ②ほうきを持ってポンポンをゴールまで運ぶ。 ③ゴール後、花マグネットをポイント表に貼る。
ま と め	5、片付け ①今日の評価を聞く。 ②係りの仕事の指示を聞く。 ③終わりのあいさつと片付け。



体育館配置図（ポンポンホッケー）



ポイント表

ゴール



6、生徒の変化

授業場面において

支援の方法、動線などの環境を整えることで、生徒は見通しを持ち、授業に参加できるようになってきた。ポイント表に花マグネットを貼ることが励みになり、周回スピードが上がり、シュート数が増えた生徒がいた。準備や片付けでも自分の役割を果たせるようになるなど、生徒が目的意識を持って主体的に活動に参加できることが増えてきた。このことは「はたらく力」「あそぶ力」を高めることにつながっていくものと期待する。また生徒は安定して活動できるようになると、周りにも目を向けるようになり他の生徒に参加を促すような働きかけを行ったり、褒められた生徒に拍手を送るなど「つながる力」の成長も見ることができた。

その他の場面において

一部の生徒ではあるが、集団活動のなかで自分の座る位置を写真カードで確かめたり、隣の生徒を意識したり、教師の呼びかけに以前より集中して応えるようになった。そして自分の座席に居られる時間が長くなり、活動ごとに自分の役割を意識することもできてきた。またクラスの掃除の時間にほうきでごみを集めるのが上手になった生徒もいる。

『時間とお金』～時給ってなんだろう～

1、望む姿・望まれる姿

金銭のやりとりは「くらす・つながる力」であり、自分の買いたい物を予算（財布の中の金額）の中で買うということは、余暇活動（「あそぶ力」）の充実に繋がる。また卒業後、作業所等で仕事を続けていく上で、欲しい物を買うことを楽しみに仕事に取り組むということは働く意欲（「はたらく力」）に繋がると考える。その中で特に労働意欲を高めていき、継続して就労する力を高等部生活を通して養いたいと考える。

2、生徒の様子

本グループは、高等部2年生の男子3名、女子2名の計5名で構成されている。授業態度は、視覚的・聴覚的な刺激に対して気をとられてしまう生徒もいるが、おおむね集中を持続させ取り組むことができる。また、質問や報告を行うことは定着しており、新しい課題に向かう際にも人による支援や支援ツールに気がつき、自ら活動しようとする。

3、単元のねらい

高等部を卒業し、社会に出て働くということを視野に入れる中で、数学の授業を通して生徒自身が仕事をイメージできる内容を取り上げた。これまで学んできた「時間」「金銭」といった分野を組み合わせ、時給について学び、働くことで得られるものを学ばせていきたい。また、金銭を自ら稼ぐことができ、もらうことのできる給料を計画的に使用していくことを今後学ばせていきたい。

4、支援環境の工夫

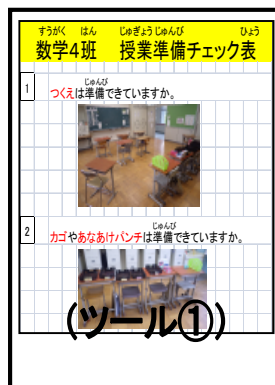
(1) 集団への支援

① 物理的支援環境

- 授業への気持ちを整えるために、授業環境を自分たちで準備できるようにした。(ツール①)
- お金を数えるときのルール（金種ごとに並べる場所、並べる順序）を視覚的に提示した。

② 人的支援環境

- 添削机を2か所に配置し、待ち時間の軽減により生徒の学習活動量が増えるようにした。



(2) 個への支援

① 物理的支援環境

- 学習時の座席移動や定位置がわかりやすいように、床へテープを貼り目印とした。
- 各自、ホワイトボードを使用しながらお金の確認ができるようにした。(ツール②)
- 1日の時間軸を理解し、時刻と時刻の間が何時間であるかがわかるよう支援した。(ツール③)

② 人的支援環境

- 生徒に応じて評価の言葉かけを工夫して行い、次の活動へ結びつきやすいようにした。
- 生徒の中に「総監督」という役割りを設け、準備片付けに対して足りない部分を自分たちで気づけるようにした。

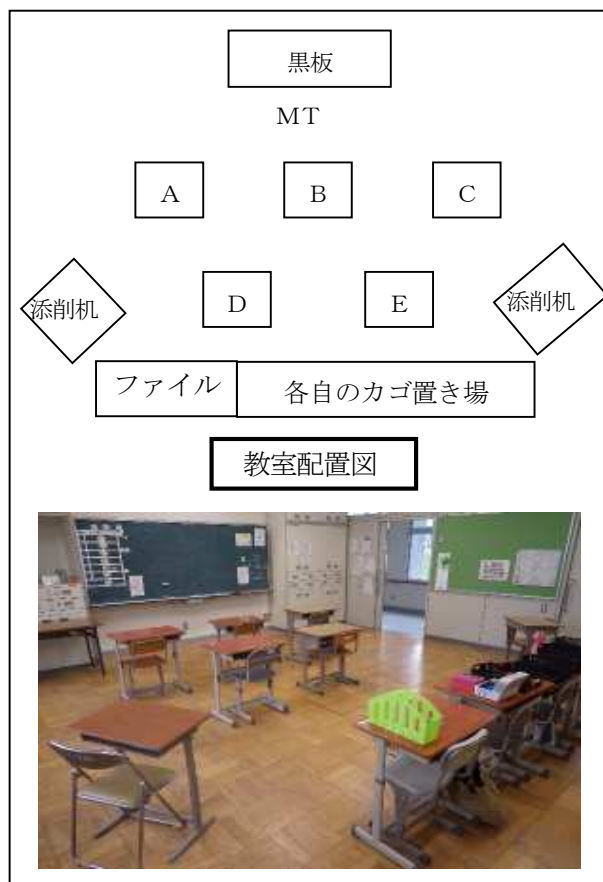


5、授業の展開

本時の目標…金銭と時間の関係性が理解でき、時給の計算ができる。

必要に応じて質問や報告することができる。

	学習活動、内容
導	あいさつ
入	活動内容の確認（日直）
展 開	1、時給への理解 ①何時～何時は○時間を確認。 ②個別にプリントを配布。 ③ビデオを視聴し、実習で働いてきた自分を振り返る。 ④自分の時給を計算し、答えを求める。 2、給料を使い決められた金額の買い物をする。 ①設定された金額の中での買い物を実践する。 ②教師に報告し、添削を受ける。 ①～②を繰り返す。 ～～～～休憩～～～～ 3、個別学習 ①個別にプリントに取り組む。 ②教師に報告し、添削を受ける。 ①～②を繰り返す。
ま と め	次回（○月○日）に実際に買い物に出ることを伝える。



『授業のルール』
姿勢や言葉使い等
授業中に注意すべき
点をまとめて黒板に
掲示し、確認できる
よう支援した。

6、こどもの変化

- ・授業場面において

準備や片付けなどにおいて生徒たち自身が授業場面の設定を行い、自分たちに必要な環境を整えることができるようになってきた。このことは将来、職場や家庭環境においても自分に必要な環境を自ら整えていくという点で大きなキャリアの力を獲得していると考えられる。

- ・その他の場面において

小集団において発言機会や質問機会を多く設定する中で、自分の発言に自信を持ち始め、他の授業やクラス活動の場面においても、積極的に発言し参加しようとする姿がみられるようになってきた。このことについても将来、職場で「分からないことを適切に質問する」「報告・連絡する」という社会で必要とされるコミュニケーション能力に大きくプラスになると考えられる。

5、支援ツール

①自発を促す手がかりツール②実行を助ける手がかりツール
③評価の機会を与える交換記録ツール④支援環境を整える協働ツールの4つがあります。

日常生活の指導

【朝の会 司会ボード】

（自発を促す手がかりツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・司会ボードを見ながら、朝の会を進行することができる。
- ・朝の会の内容を友だちや先生に知らせる。

○支援ツールの使い方

司会机に提示しておき、司会はボードの絵をめくりながら、活動内容を友だちに知らせていきます。全てのページに司会の人顔写真が貼ってあり、自分が朝の会を進めていくという意識を持って取り組むことができます。言葉で伝えにくい児童は、教師の支援と共に、ボードの絵を通して伝えることができています。

司会ボード



つながる力

体育科

【周回数ボード】

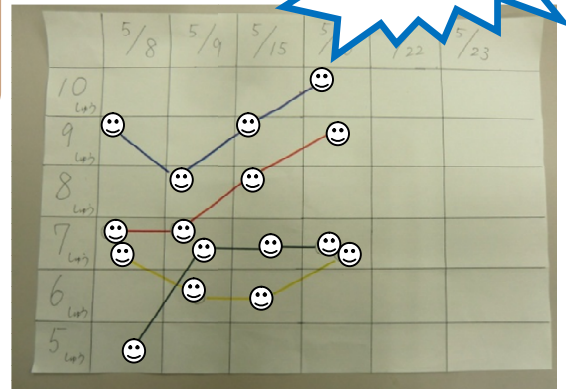
（評価の機会を与える交換記録ツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・毎回の周回数を記録していくボードを用意することで、自分の周回数の変化を分かりやすくし、更に記録を伸ばしたいという気持ちを高める。

○支援ツールの使い方

自分が周回した数のマスに顔写真を貼り付けます。前回の周回数と比較しやすいように線でつなげて個々の頑張りを全体の場で評価し、次回の意欲向上につなげています。



くらす力

数学科

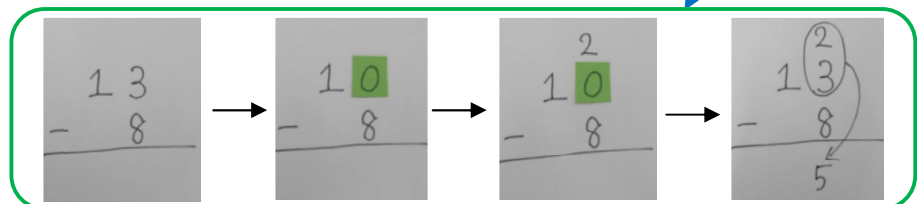
【O カード】

（実行を助ける手がかりツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・一人で繰り下がりのある引き算ができるようになる。

○支援ツールの使い方



画用紙などに 0 を記入しただけのものです。13-8 の場合、引かれる数字の一の位にカードを乗せ、10-8 を計算して 2 を記入します。その後、カードを外して、2 とカードの下に残ってあった 3 を足して、答えは 5 となります。色々試しましたが、この方法が視覚的にも理解しやすいようでした。

くらす力

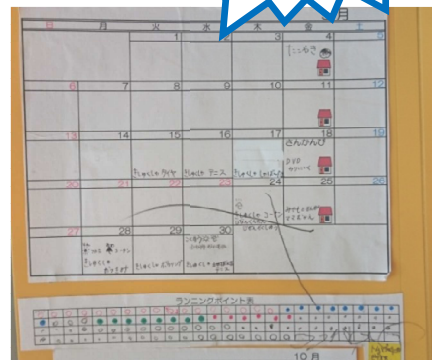
自立活動 【お楽しみがんばりブック】 （評価の機会を与える交換記録ツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・ お楽しみを期待して活動を継続できる。
- ・ 活動の成果を様々な人と共有できる。

○支援ツールの使い方

学校・寄宿舍・家庭間での連絡ノートに、日課のランニング周回数記録表とそのご褒美、月のお楽しみイベントの予定を記したコーナーを作りました。ご褒美や予定が心配で質問が多いAくんですが、関わる大人たちの情報共有が進んだことで安心できるようです。



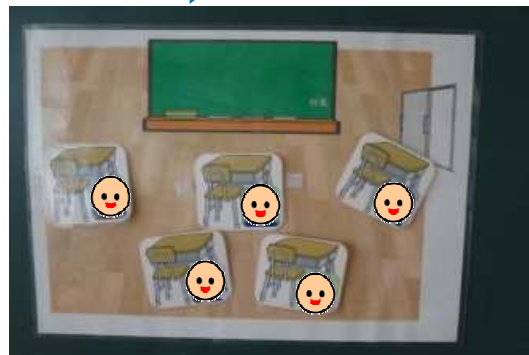
数学科 【座席配置表】 （支援環境を整える協働ツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・ 自分たちで授業環境を整えることができる。
- ・ スムーズな机の配置移動ができる。

○支援ツールの使い方

授業前に表を掲示しておきます。生徒の机写真にはマジックテープがついており、どのような配置にも対応できます。生徒たちは表を見て、机の位置を把握し、準備を行うことができます。また、できていない友だちへの言葉かけの媒体にもなっています。



作業学習 皮革班 【作業用ノート】 （評価の機会を与える交換記録ツール）

○支援ツールのねらい（期待される力）

- ・ 作業目標が達成できたか自己評価することができる。
- ・ （自己評価だけでなく他者評価をいれることで）自己評価と他者評価のずれについて気づくことができる。

○支援ツールの使い方

自分たちで立てた作業目標について自己評価するだけでなく、他者評価をいれることで、自分ができていると思っていても他者から見るとできていない事もあるということに気づかせるための支援ツールです。自己評価ができるようになるだけでなく、他者評価とのずれに気がつき、努力できる生徒が多いです。

ひかくのぶる
皮革作業ノート（5、6班用）
★1週間（月・水・木）で1枚つかいます。
◎反省（毎回 書きましょう。）
よくできた・・・ ◎ まあまあできた・・・ △ できなかった・・・ ×

	月 日	月 日	月 日
① 思いどおしにすることができたか。			
② 目標通りに気づきつけて励むことができたか。			
③ 目標通りに気づきつけて作業することができたか。			
④ 楽しやかに作業することができたか。			
⑤ 作業目標に気づきつけることができたか。			
⑥ 反省・連絡・質問をすることができたか。			
⑦ 作業目標にがんばることができたか。			
⑧ 目標をこなしたか。			
⑨ 遅れるときは遅延をすることができたか。			

他者評価を記入
自己評価を記入

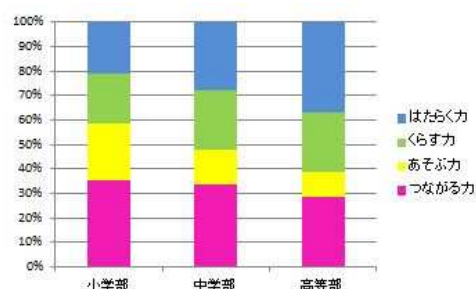
6、全体考察

校内の授業研究会では、教師相互で授業を参観し、キャリアの視点が取り入れられていると思われる場面について“育てたい力の枠組み”に対応した4色の付箋に感想を添え、展開図に貼り付けました。

またそれらの分析を通して“育てたい力の枠組み”についての理解を深めました。

学部間での量的傾向

各授業に貼られた付箋の量的傾向は右図の通りです。各学部で対象とした授業は違いますので、教科の性質による影響も考えられますが、「つながる力」については、どの学部の授業でもほぼ同じ割合でみられました。一方、「あそぶ力」については小学部で多く徐々に減少しています。逆に「くらす力」「はたらく力」は高等部になるにつれて増加しています。



それぞれの“育てたい力”で大切にしている活動

本校の教師がキャリア発達において大切な活動だとして付箋に書き留めた内容を分類しました(右図)。

「はたらく力」は協力して活動できる姿勢や、前向きに取り組む姿勢、社会性等態度に関する力と捉えています。が多かったです。「くらす力」は生活のための基礎的な技能や習慣、判断する力、日常生活上のコミュニケーション能力等と捉えていました。「あそぶ力」はあそびへの関心・選択できる力・意欲的に活動できる力や、ルールの理解とルールに沿った行動を大切にしていました。「つながる力」は一方向のはたらきかけから、生徒相互の関係や仲間意識といった対人関係の態度や能力を大切にしていることがわかりました。

はたらく力	くらす力	あそぶ力	つながる力
活動 準備・かたづけ 社会性 前向きな姿勢	生活技能 コミュニケーション 判断力 関心・意欲	ルールの理解と行動 意欲的な活動 選択 関心	生徒相互のはたらきかけ 一方向のはたらきかけ エンジョイプレイ 仲間意識

多様な育ちが期待されるものとしての“枠組み”

このように付箋には一定の傾向がみられ、教師間での共通の枠組みとしての成果を見出すことができました。しかし、例えば掃除の活動を「はたらく力」と分類する教師もあれば、「くらす力」や「つながる力」と捉えた教師もありました。私たちは“育てたい力の枠組み”として4つの力を提示していますが、ひとつの活動でひとつの力が育つという一対一の対応で捉えるのではなく、ある活動から能力や態度が多様に育つ可能性があるものだということも、教師間で確認しあうことができました。

各学部での“育てたい力”の特色とは？

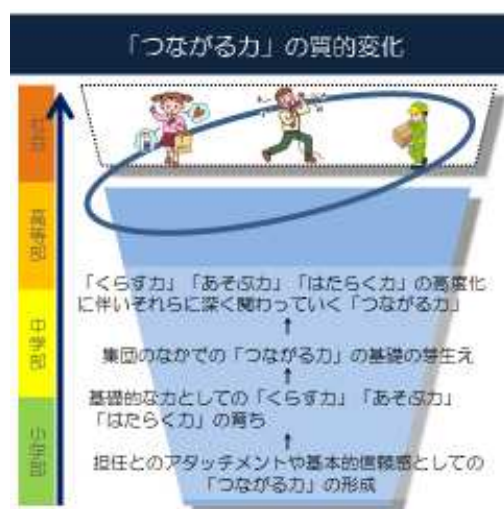
各学部での議論を集約し、比較していくと、共通点や相違点がみえてきました。上述の『学部間での量的傾向』では、小学部では「つながる力」や「あそぶ力」に力点が置かれており、中学部では「くらす力」や「つながる力」に、高等部では「はたらく力」や「くらす力」にその力点が置かれている様子が見えてきました。

また、その内容も掃除や片付けといった各学部共通で大切にしている活動もあれば、中学部段階になると「くらす力」としてマナー学習に取り組まれるようになったり、「つながる力」では、小学部段階はペアを作っている活動が多かったものが、高等部では仲間意識等をねらった学習も加わって来たりします。

当初“育てたい力の枠組み”は、授業でつけた力を発揮する場面を想定した「くらす」「あそぶ」「はたらく」の力があり、それらを下支えする力として「つながる力」があると仮定していました（『4つの力の定義』参照）。しかし各学部が議論するなかで、さまざまな“育てたい力の枠組み”を関係付けるアイデアが生み出されました。高等部では、当初の仮定に類似した考えでした。「くらす」「あそぶ」「はたらく」の3つの場面に影響しうる重要な要素として「つながる力」があるという考えです。一方小学部のなかでは、「くらす力」「あそぶ力」「はたらく力」の充実がって、「つながる力」をねらう活動に取り組みやすくなるという感想が聞かれました。分かって動ける授業づくりでも、活動の機会や量を確保することが授業を展開する上で重要視されています。しっかりと活動できることがあって、教師や友だち同士の関わり合い（つながる力）の育つ機会が生まれてくるという考えです。

これらの考え方には学部（生活年齢）の特徴が影響されているのかもしれませんが。小学部では生活に必要な基礎的な技能や基本的なルールを守る態度が成長しつつある段階にあります。担任との基本的信頼関係を支えることは言うまでもありませんが、授業において学習に向える態度やルールを守る姿勢が重要となります。基本的な授業態度が育つことで多様な授業展開が可能となり、他児童と関わる機会も生まれてくるという段階です。

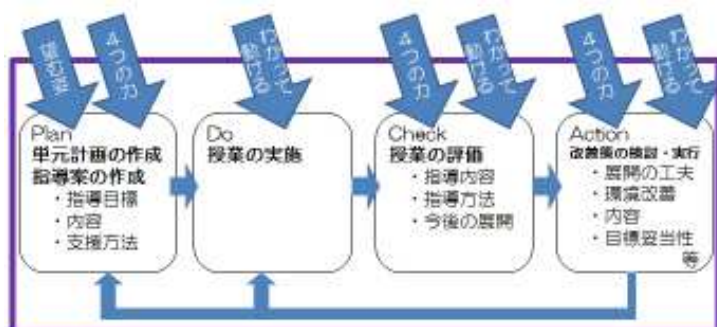
一方中学部や高等部では、基礎的な生活技能や授業態度がある程度身についており、より高度な「くらす力」や「はたらく力」を求めるなかで「つながる力」が重要度を増してきているのではないのでしょうか。たとえば中学部や高等部では、「はたらく力」でも協働の姿勢や社会性が重要な活動として挙げられていますし、「くらす力」においても相手に助けを求めたり要求を伝えたりする技術としてコミュニケーションが挙げられ、「学び合い」の機会が多く設けられています。



分かって動ける授業づくり＋キャリアの視点＝地域社会で生きる力を育てる授業

これまで私たちは、「分かって動ける授業づくり」という教授方法を学ぶことを通して授業改善をすすめてきました。

続いて、「分かって動ける授業づくり」を基盤に、授業づくりの過程にキャリアの視点を取り入れました。キャリアの視点を取り入れたことで、「地域社会で生きる力を育むにはどのような授業をすればよいか」と思考することができ、また枠組みを規定したり望む姿を書き



記したりすることで、授業改善の過程における教師間での意図の共有がすすみました。今回の本校の取組みは、短期的には効果的な視点であったと考えます。これらの成果を本校の学校文化として継続させることが、長期的な視点での成功の鍵となることでしょう。

7、コラム

キャリア教育の視点として考えたはまゆう版4つの力は、授業で学んだことを学校生活の様々な場面や家庭や地域で活用することで生きる力につながっていきます。授業場面以外での取り組みを紹介します。

自立的・主体的に行動する力を！！～生徒会の取り組み～

生徒会活動では、高等部生徒会役員が朝のあいさつ運動を行っています。小学部児童の背丈に合わせて姿勢を低くしたり、丁寧なあいさつを心がけるなど自分たちで意識を高めて取り組んでいます。また、生徒会役員以外の生徒の参加など自主的な行動が見られるようになりました。

小学部では児童会役員がスリッパ並べに取り組んでいます。中学部では、代表委員が児童・生徒目標の啓発ポスターを作成しています。

児童会・生徒会という活動の中で自立的・主体的に行動する力を育み、学校生活や社会生活に積極的に参加しようとする児童生徒を育てたいと考えています。



自分の役割に責任を持とう！！～寄宿舍より～

寄宿舍では、日課としてお風呂当番・食堂当番・朝の掃除の3つの当番活動に取り組んでいます。一人ひとりの「当番札」を作成し掲示板に貼って活用しています。声を掛け合い、助け合いながら活動しています。当番活動などは写真つきの手順表を貼っておくことで、自分たちで取り組むことができるようになりました。最後まで自分たちでやりきること達成感があり、慣れてくると、自信を持って活動するたくましくなった舎生の姿が見られます。寄宿舍での集団生活を通して、一人ひとりが「自分の役割に責任感」を持って取り組むことで、集団としての自覚が高まり「自立心」が生まれてくると感じています。



学校と家庭の連携 ～月予定表の活用～

1か月の見通しが持てるように、学校と家庭で同じ「月予定表」を使っています。登校を示す学校の写真と休みを示す家のイラストのみが貼ってあるシンプルな予定表です。行事や生徒が楽しみにしている活動については、月予定表にイラストを付け加えるようにしています。



保護者より

修学旅行の予定があった月は早くいきたい気持ちを抑えられない時がありました。その時は月予定表を指差ししながら一緒に予定確認すると、納得して気持ちを静められました。おかげで、行事を楽しみにしながら落ち着いて生活することができました。

本校の授業改善に関わったなかでみられた変化と今後の課題

創価大学教育学部児童教育学科 藤原義博



現在、他の特別支援学校においても、「分かって動ける授業づくり」によるキャリア教育に取り組んでおります。そこで、これまで見てきて確認された授業改善による教育成果を本校の先生方に伝えてまいりました。

小・中学部・高等部の実践報告では、「支援ツール」の充実と「物理的支援環境」・「人的支援環境」の整備によって、児童生徒が見通しを持って授業参加できるようになり、物を介した友だちとのやり取り活動の工夫で、繰り返し友だちと一緒に遊べ、自ら友だちの名前を呼んでハイタッチするなど、仲間同士のやり取りが広がりコミュニケーション能力が向上した、といった「こどもの変化」が報告されております。

また、児童生徒の「活動(学習)参加機会」の設定工夫では、学習環境を自分たちで整備させ授業場面の設定を行わせるといった「準備・片付け」の役割の明確化により、役割をしっかりと果たして自分たちに必要な環境を整えるといった、主体的に活動に参加できる姿や学習の流れへの見通しをもって学習参加する姿がみられ、ペアでの活動継続や小集団での発言機会や質問機会の設定によって、他の生徒に参加を促し、褒められた生徒に拍手を送る姿や自信を持って積極的に発言参加しようとする姿等が見られております。

以上の成果は、はまゆう版 4 つの力（つながる・はたらく・くらす・あそぶ）に関する望む・望まれる姿であり、これらこそが正しくこれまでに確認されている「分かって動ける授業づくり」による教育成果です。今後はこれを基盤に、更なる教育成果が確認されている以下の授業改善に取り組んでいかれることを期待致します。

授業改善での確認すべき観点は、各授業の目標や目的に応じて、「全て」の児童生徒の自立的・主体的な「集団参加」を促し、授業内容や授業展開を広げ高め、「全て」の児童生徒の「協同的活動力」を育むことができているか、との見直しです。

そこで、教師とのやり取りを「児童生徒同士のやり取り」につなげ、能力差があっても「全ての児童生徒に役割」を持たせ、「グループ」で目標達成を目指して、各自が役割を果たせるように「仲間同士が相互に支援し確認・評価」を行うという、児童生徒同士が「協同的に活動」し学ぶ機会を豊かに設けることです。

学年や学部につながりと一貫性をもつて、こうした改善教育を重ねることで、今後の更なる多大な「こどもの変化」が期待されます。